

ドイツ・フライブルクに学ぶ環境と都市



ドイツ・フライブルクに学ぶ環境と都市

楠 菜摘

【旅の目的】

ドイツ南部に位置するフライブルクは、環境政策に積極的であり、またそれに見合う十分な成果を上げているとして「環境首都」に任命されたエコ・シティである。

リユースのペットボトル回収運動は市民に定着しているし、どんな山奥の村にもソーラーパネルが普及している。また、子ども達への環境教育も活発に行われており、都市の中心であるゼーパークには1986年にエコステーションが建設され、子ども達に対する水辺教室や自然とふれあう活動が行われている。新しい町作りとしては、ソーラーパネル団地やゾネン・シフ (SonnenShiff 太陽の船) で知られるヴォーバン地区が挙げられる。

NGOをはじめとする環境保護のための市民団体も、フライブルクに数多く存在している。今回お話を聞くことが出来たアクセル・マイヤー氏が事務所を開くBUND (ドイツ自然環境保護連盟) や、及川^{まさし}氏をはじめとするフライブルク在住の日本人の環境団体の「エコ・フライヴィリヒ」もその一つである。

今回の研修旅行では、フライブルクの様々な環境に対する取り組みに触れ、環境へのアプローチの仕方や、人と自然の関わり合い方などを学んだ。

【行動日程表】

2008年 8月18日	福岡空港→香港経由→フランクフルト
8月19日	フランクフルト空港到着→フライブルク・市内探索
8月20日	アクセル・マイヤー氏訪問・インタビュー
8月21日	エコステーションの活動に参加
8月22日	午前：エコステーション代表にインタビュー 午後：ヴォーバン地区を探索
8月23日	ザンクト・ペーター訪問
8月24日	エコ・フライヴィリヒの方々とカンデルへ遠足
8月25日	エコ・フライヴィリヒの植木さんにヴォーバン地区を案内頂く
8月26日	旧市街探索・帰国準備
8月27日—8月28日	フライブルク→フランクフルト→香港→福岡

【フライブルクの町の構造】

福岡からドイツに行く直行便はないので、香港国際空港を経由してフランクフルト空港へ行く。さらにそこからICE特急で二時間かけてフランクフルトの中央駅につく。

フライブルクは比較的小さな都市で、ハプスブルク家統治時代の洗練された町並みの中を、シュトラセンバーン（Strassenbahn 路面電車。トラムとも）が通っている。このシュトラセンバーンは鈍行列車のように各駅に止まり、その駅は町に住む人々の家から徒歩五分で利用出来る。電気を使う、大気にクリーンなエネルギーは魅力である。この路面電車は一日切符を買えば乗り放題になる。

町のシンボルでもあるミュンスター大聖堂は数年前から工事があっているらしく、今回も屋根の補強工事が行われていた。美しい大聖堂の屋根や石像も、所々黒ずんだ箇所が見られ、酸性雨の影響の強さを感じさせる。やはり酸性雨の影響は、アジアよりもヨーロッパの方が深刻らしい。

町はミュンスター大聖堂を中心に発達しており、月曜から土曜日まではこの広場で市場が開かれる。現地直送、地産地消をモットーに古くから行われてきたこの市場は活気に満ちている。市場に置いてある野菜は、作った本人が売っているので身元がはっきりした安全な野菜だ。八百屋の方と仲良くなるとおまけもしてくれる。

フライブルクは、居住区、繁華街、旧市街がはっきりした作りになっている。旧市街に関しては歴史的建築の保護が重要視されており、昔の家をそのまま再利用することが行われている。例えば、古い集合住宅は一階部分を全て店にするという法律がとられている。このように景観や歴史を大切にするフライブルクの町並みは本当に素晴らしい。だが、町のあちこちに落書きがあったり、たばこの吸い殻が落ちていたり、個人のマナーを見直す必要は十分にある。



(シュトラセンバーン)

(ミュンスター大聖堂)



〈ミュンスター大聖堂の広場の市場の様子〉

【BUND アクセル・マイヤー氏の話】

BUND（ドイツ自然環境保護連盟）とは、文字通りドイツの環境を保護し、その活動を外に向かって発信する団体である。フライブルクは近隣の町と結託しており、ライン川のゴミ・水質汚染問題や、フランスの原発反対運動、子ども達への環境教育のアシスタントなどを行っている。今回お話を聞くことが出来たマイヤー氏はそのリーダーの一人だ。

マイヤー氏は両生類の保護や水質汚染問題が専門で、現在もそのようなレポートを作成している。ミュールハイムの広場に杭を打って針金をわたし、そこにライン川から拾ったゴミを BUND で行ったが、これはメディアに大きく取り上げられ、地元紙も記事にした。

また、BUND の活動を大きく知らせたのが、環境に関するエキシビジョンである。このエキシビジョンでは多くのポスターが飾られ、中でも子ども向けに作られたパンフレットは好評だった。四コマ漫画のようにイラストがメインの作りで、「小鳥たちのために巣箱を作り、自然と仲良く暮らそう」と言ったことが書かれている。このパンフレットに登場する巣箱は 10 ユーロを募金すれば作ることが出来る。マイヤー氏はこの巣箱を作るキットを市内の幼稚園に寄付する活動を行っている。



〈幼稚園に寄付している巣箱〉

【エコ・ステーション】

フライブルクが環境政策を行うに当たり重要視しているのは、小学校の年齢の子ども達を中心とした環境学習である。

エコステーション（写真・上）はそうした環境教育を行う施設の一つで、土曜、日曜、祝日を除き、子ども達に向けたプログラムを行っている。土壁の上にシュヴァルツヴァルトで切ってきた丸太が組んであり、天井から光が差し込む作りになっている。丸太の上には土が盛ってあり、野草が緑色の屋根を覆っている。太陽パネル完備。小さな浅い池と庭を併設している。運営しているのはフライブルク市だ。

大人のスタッフが 2、3 名に対し子どもは約十人。私が見学した二日間は「古新聞を使った再生紙作り」、「水辺にすむ生き物調査」を施設内で行った後、併設してあるビオ・ガ

ルテン（庭）に移動し、屋外でたき火をしたり、自然の絵の具（左）を作って遊んだりしている。子どもが主体、大人はあくまでその手助けをするスタッフであって、遊んで学ぶ実践学習の場が作られている。

スタッフには英語が通じるので、英語でインタビューをした。日本人に対して何かメッセージは？と尋ねると、「ドイツと日本は違うところがたくさんある。多くの国々が、それぞれの事情と文化を抱えているので、やらなくてはいけないことはバラバラである。でも向かうところはどこも一緒に、自然は大切にしなければならない。」とおっしゃっていた。我々は他国に学ぶ前に、もっと自分の国のことを知らなくてはならない。



〈←エコ・ステーション〉



〈←エコ・ステーション内装〉

【エコ・フライヴィリヒ】

及川 斉氏を中心とした、フライブルク在住の日本人による環境団体。現在 13 名。参加している人々の経歴は様々で、会社を辞めてフライブルク大学で新林学を学んでいたたり、ワーキングホリデーでドイツに来ていたり、ドイツのおもちゃ作りの会社に勤めていたりする。フライブルクの環境政策について意見を持ち寄り学んでいる。外へ情報を発信するために、「エコフラ通信」という日本語の手書き新聞を発行し、エコステーションを始めいろいろなところに置いている。

以前は、フライブルクに住む日本人のために、ドイツのゴミ分別表を日本語に訳す活動をしていた。ドイツのゴミに関する条例は細かく、ドイツ人にもわかりにくい。日本人ならなおさらなので、和訳した分別表は日本のインフォメーションセンターに置いていた。現在は日本の小・中学生に向けて、環境を学ぶためのビデオを制作中。フライブルクを「森」「ゴミ」「町作り」の三つの観点に分け、制作を紹介し、これからの課題、問題点、そして日本では何が出来るかと言うことを訴えたいという。わたしもそのビデオ作りの一環とし

て、カンデル山の遠足に参加させてもらった。

単独でドイツに渡ってきた人が多いのでエネルギッシュな人が多い。興味のあることには何でも取り組み、気になるビデオや本があればみんなで見合う。メンバーの中には帰国した人もいるが、メールなどでやりとりは続けている。



〈カンデルの山頂から〉

【ヴォーバン地区】

エコ・フライヴィリヒのメンバーの植木 由佳さんにヴォーバン地区を案内していただく。

戦後、もっともエコロジーな町作りを進めている地区の一つに、ヴォーバン地区が挙げられる。景観を守り、自然を保護するためフライブルクの住宅建設の規制は厳しく、勝手なことはなかなか出来ない。しかし、ヴォーバン地区はそうした規制のラインがとても緩いため、もともとエコ意識が高く、なおかつ創作意欲が高井建築家や設計士が集まり、ユニークな家が建ち並ぶ団地を形成している。その最たる例がヘリオトロープだろう。

ヘリオトロープを始め、この地区では太陽パネルを採用した家が多く建設されている。様々な会社が入った複合ビル Sonnen Schiff (ゾネンシフ・太陽の船の意味) を中心にしたソーラーパネル団地も存在する。この団地の家はソーラーパネルだけで日常の生活エネルギーをまかなっているのだ。我が家でも太陽パネルを採用しているが、風呂を沸かすぐらいにしか使っていない。比べものにならないと感じた。また太陽光を利用する点では「パ

「パッシヴ・ハウス」という考え方もある。フライブルクには各人家に電気をはじめとするエネルギー消費量が定められており、その消費量が低い家ほどエコな家であるといえる。例えば、南向きの家は日照時間が長いので電気を使う時間が短く、北向きの家よりもよりエコな造りであるといえる。こうした考え方を「パッシヴ・ハウス（受け身の家）」という。パッシヴといっても消極的という意味ではなく、自然の恵みを多く受けるという意味だ。この考え方を採用し、側面が磨りガラスで覆われた駐車場もある。

家だけでなく、団地の造りそのものにも自然を生かした工夫や、人間のことを考慮した部分が見られる。地区のあちこちに見られる公園は、こどもの居場所作りのほかに、広いスペースをとることで風通しをよくするという目的がある。また道路の脇にある排水溝はコンクリートではなく、土を掘って芝生を植えた溝になっている。下が土になっているので、大雨になっても雨水がすぐに土にしみこみあふれない造りになっている。道路でよく眼にする図の標識は、「この道路では、歩いている人も、こどもも、車も同等の権利を持つ」と言うという意味で、車は人が歩くのと同じような速度で運転している。ヴォーバンを歩いていると車の数が少ないと感じるが、それは団地内の道路がほぼ袋小路になっているためである。車の代わりに、ここでもシュトラセンバーンが利用されているが、この地区の線路には騒音防止のため芝生が植えられ、緑化活動に一役買っている。

このように人と自然に優しい団地代表のヴォーバンだが、中・高校生の居場所が無く、学校が荒れていると言った問題を抱えている。



〈←ヘリオトロープ〉



〈←ヴォーバンでよく見かける標識〉

〈←ソーラーパネル団地〉



〈←側面が磨りガラスで出来ている駐
車場〉



【人と自然の距離】

フライブルクで、歩いたり、人と話したりして感じるのは、人と自然の距離がとても近いということだ。

フライブルクの街路樹や庭木を見ていると、日本の整えられた感じはなく、生えたまま残している印象を受ける。これはフライブルクの住宅事情に関係していて、家を建てる際に、敷地内の大きな木は切り倒さずそのまま残しておくかなくてはならないという規則があるからである。だから、庭木のない家を探す方が難しい。

休日の過ごし方も自然志向である。今回足を運んだザンクト・ペーターやカandelもそのようなスポットの一つだが、フライブルク市民は休日、特に日曜日になると、家族や友人と近くの山に遠足に行ったり、ハイキングをしたり、もっと極端な人だと山の中に寝袋一つで野宿する(!)人もいる。日本のようにカラオケに行ったり、ショッピングに出掛

けたりするという人はなかなかいない。自然の中で思いっきり羽を伸ばし、家族との時間を大切にしようというのがフライブルク流のようだ。げんに、カンデルに行ったときはツーリングのグループや、日光浴のために草原に横になっている夫婦の方をよく見かけた。走り回ったり木登りをしたりすることも達も見た。自然は何よりの遊び道具である。



〈ザンクト・ペーターの風景〉

【まとめ】

今回の旅行で感じたのは、私たちはもっと日本の事情について学ばなければならないとすることである。環境問題は、今や世界各国が抱える重要な問題の一つだ。その根底にある「自然を守る」という目的に向かって、それぞれにあったアプローチをしなくてはならない。

フライブルクは学ぶことは多いものの、あくまでモデルの一つだ。ペットボトル回収運動やゴミ分別のためのゴミ箱作りは日本でも出来る。だが、中にはそっくりそのまま日本に持って帰ってそれを実践したとしても、決して上手くはいかない政策も多い。現に、平地の少ない日本のような山の国では、シュトラセンバーンの普及は不可能だろう。

しかし、近年盛んになっている東京都やアクロス福岡などの都心で行われている緑化活動や、団地にちょっとした植え込みを作ってビオトープを保護するといったことなら可能だ。作ったら、どのように維持するかを考えるのも重要だ。今存在する自然を守るために、ゴミやエネルギーを節約するために出来ることがきっとあるはずだ。

日本にいるから、日本人だから出来ることを考えていきたい。

最後に、このような機会を与えてくださった国際文化学科の先生方、職員の皆さん、導教官の中島和男先生、BUND のアクセル・マイヤー氏、エコ・ステーションのスタッフの方々、エコ・フライヴィリヒの皆さん、援助して下さったたくさんの方々にこの場を借りてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

ドイツ・フライブルクに学ぶ環境と都市

楠 菜摘

【旅の目的】

ドイツ南部に位置するフライブルクは、環境政策に積極的であり、またそれに見合う十分な成果を上げているとして「環境首都」に任命されたエコ・シティである。

リユースのペットボトル回収運動は市民に定着しているし、どんな山奥の村にもソーラーパネルが普及している。また、子ども達への環境教育も活発に行われており、都市の中心であるゼーパークには 1986 年にエコステーションが建設され、子ども達に対する水辺教室や自然とふれあう活動が行われている。新しい町作りとしては、ソーラーパネル団地やゾネン・シフ (SonenShiff 太陽の船) で知られるヴォーバン地区が挙げられる。

NGO をはじめとする環境保護のための市民団体も、フライブルクに数多く存在している。今回お話を聞くことが出来たアクセル・マイヤー氏が事務所を開く BUND (ドイツ自然環境保護連盟) や、及川 ^{まさし} 氏をはじめとするフライブルク在住の日本人の環境団体の「エコ・フライヴィリヒ」もその一つである。

今回の研修旅行では、フライブルクの様々な環境に対する取り組みに触れ、環境へのアプローチの仕方や、人と自然の関わり合い方などを学んだ。